

2022 年度 幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づく自己評価

作成日

法人名
田名橋学園

園名
和田幼稚園

まとめ

第2章第2節 乳児期の園児の保育	乳児保育が人格形成の土台をつくっていく。愛情豊かで受容的・応答的な関わりを通して、愛着関係を形成し、人に対する基本的信頼関係を培っていく。周囲の大人から愛され、受け入れられ、認められていることを実感し、自己肯定感を育てていく。安心できる、安定した環境の中で活動範囲がひろがり、探索しながら世界を知っていく。保育者が園児一人一人の存在を大切に感じ、温かい家庭的な雰囲気のもとに、愛情をより注いでいきたい。
第2章第3節 満1歳以上満3歳未満の園児の保育	担当制を行い、一人一人と丁寧に関わることで、生活が安心・安定し、子どもたちが安心感をもち園生活を暮らすことを大切にできた。その安心感を基盤に、基本的信頼感を育み、一人一人の心情・意欲が育っていくように養護と教育を一体的に行ってきた。「養護を土台として、生きる力を培っていく」。基本的信頼感を育てているからこそ、「だいすきな」保育者を見本とし生活の流れを共有していく、「自分でしたい」自我が育っていくことができる。より一人一人の思いを表情や声から読み取り、応答的、共感的に関わりながら、子どもたちが「自分でしたい」という思いや願いを尊重しながら、一人一人の発達や生活の自立を温かく見守り援助していく。
第2章第4節 満3歳以上の園児の教育及び保育	今年度もサークルタイムや保育環境の見直しを行ってきた。「安心感や居心地感を大切に」保育環境を見直し、子どもたちが安心して、環境に自ら関わっていくように準備をしてきた。子どもたちは自分で、友達と遊びに夢中になって充実感や満足感を味わっている。子どもたちにとって、「遊ぶことは生きること」。遊びことで脳が活性化し、学びにつながっている。遊びながら、五感を通して学ぶ喜び、世界の仕組みを知っていく。体験したことを活かしながら、遊びを広げ、思考を広げていっている。
第2章第5節 教育及び保育の実践に関わる配慮事項	「子どもたちを真ん中に」保護者と園で協力して子どもたちの育ちを支えていく。新型コロナウイルス感染症の感染予防を行いながら、1学期にクラス見学会、面談、2学期に運動会、一日保育士体験、生活発表会、3学期に保育参加、面談を実施してきた。一日保育者体験では、保護者が保育に入ることで保育への理解や園生活での子どもの育ちを知る機会になり、また給食の試食会などを行い、日頃の子どもたちの様子を知ってもらう機会になった。子どもたちにとっても、保護者の方が園で共に生活することで人への関心や他者理解へとつながっていています。
第3章 健康及び安全	コロナ禍の中、健康、食育、安全管理、避難訓練等を保育者、そして保護者の理解のもと実施してきた。食育については、コロナの影響を受けながらも、子どもたちの食への関心や興味、食べる喜び、作ってくれる人との関係など様々な取組みを実施することができた。園児引き渡し訓練、一日保育士体験等や日常の保育を保護者と子どもたちと園で共に作っていくか「子どもを真ん中に」次年度も取り組んでいきたい。園児の健康増進や食育の充実等の取組は子どもたちの生命の保持・情緒の安定につながっていく。看護師・栄養士・調理師・保育者と連携しながら、子どもたちの健康や安全に取り組んでいく。
第4章 子育ての支援	虐待や不適切な保育。貧困。社会の変化が子どもを取り巻く環境をよくない方向に向かわせている。新型コロナウイルスの影響で、園内で保育を参観する機会はないが、戸外で子どもたちが元気に体を動かす様子や一緒に遊ぶ経験ができるような機会をつくってきた。クラスだよりにおいても、遊びの中の子どもたちが今何を感じて、何に興味をもっているのか、何が育っているのか、子どもたちの姿を伝えている。保育に共に関わってもらうことで、子どもを知り、子育てを楽しめる。保護者と共に子育てを楽しめる環境づくりを次年度も取り組んでいく。
第5章 職員の資質向上	職員の質向上において、業務改善と保育の質の両輪をバランスを取りながら実施する必要がある。業務改善においては、記録（月案・週案）を見直し、ノンコンタクトタイムを設けてきた。これにより、業務改善につながり、働きやすさにも影響している。保育の質においては、リーダー層の「やってみよう」という挑戦する心持ちが園の保育を大きく変えてきた。子どもたちの遊びの環境や保育の仕方等、研修で学んだことを実践に活かしながら、子どもたちと共に園の生活をつくっていている。次年度においては、研修機会を確保し、研修内容等の見直しを進めていく。遊びの広がりや子どもの心についての多彩な研修を準備し、保育者の地帯を広げていける機会を作っていく。また、園内研修や日々の振り返りの質を高めることで、さらに園の保育が充実していくと思う。幼小接続など架け橋期の子どもたちの育ちの共有を小学校と交流をしながら図っていく必要がある。
総合	「子どもが主体的に遊び、自ら環境に関わっていく」姿が昨年度よりもより多く見られるようになった。安心感と居心地感を大切にできた保育環境。遊び・玩具などの量を増やし、自ら選び決めていけるように自律と自尊を大切にできた結果が大きく影響している。子どもたちは情緒が安定し、様々な環境に自ら関わりながら遊んでいる。「0歳からの保育の大切さ」、「0歳からの育ちの連続性」乳児期におけるアタッチメントからの愛着の形成、基本的信頼感の獲得。人と人との関係性のなかで人は育っていく。1・2歳児から担当制を実施し、一人一人の子どもたちと丁寧に関わっていくことを大切にできた。乳児保育という人格形成の土台づくりの時期が今後の社会の未来を作っていく。今年度も保育環境、組織づくり、保育の質について重点的に取り組んできた。「環境が変われば、子どもたちが変わる」「社会が変われば、子どもたちが変わる」を合言葉に。保育環境の大切さ、保育者の丁寧な関わり大切さを感じる一年になりました。小学校との接続や地域社会との関わりにおいては、小学校と研修機会をもち、保育や子どもたちについて共に学びました。小学校と園と共に子どもたちについて考える時間を次年度も実施していく。また、子どもたちが地域の中で、生き生きと輝く社会を作っていく必要がある。小学校との交流会や田植え・こんにやく工場見学、グリーンセンターでの買い物、地域と関わりながらさらに開かれた幼稚園を進めていく。子育て支援では、一日保育士体験を実施し、保護者の方に保育、園の生活、保育の仕事、給食について体験してもらいました。保護者と共に育っていく学んでいく関係を築いていく。保育の専門性を高めながら、子どもたちにとって最善の利益を考慮し、一步一步進んでいく。

内容	項目数	平均
「乳児保育」	0	#DIV/0!
「3歳未満児保育」	32	3.73
「3歳以上児保育」	53	3.91
「教育保育の配慮事項」	16	3.80
「健康・安全」	29	3.88
「子育ての支援」	18	3.78
「職員の資質向上」	9	3.72
計	157	3.83

